

精神疾患は脳の障害ではない―「空脳論」の観点から

田所 重紀 (Shigenori Tadokoro)

東京大学大学院総合文化研究科／室蘭工業大学保健管理センター

現在、伝統的に内因性や器質性と分類されてきたものにとどまらず、心因性と分類されてきたものも含め、あらゆる精神疾患の病態を理解することを目的として、脳を対象とした夥しい数の生物学的研究が行われている。こうした事実は、程度の差こそあれ、大多数の精神科医が「脳に関する生物学的知見はあらゆる精神疾患の病態理解に役立つ」と素朴に信じていることを示している。こうした信念の背後には、「脳の障害としての精神疾患」という、漠然としていながらも根強く共有されてきた概念が存在すると演者は考える。本発表の目的は、この「脳の障害としての精神疾患」という概念を批判的に検討した上で、新しい精神疾患の概念を提唱することである。

「脳の障害としての精神疾患」という概念は、「脳は心の働きを司る器官である」という、心と脳の関係についての一つのテーゼを前提にしていると演者は考える。すなわち、全身に血液を循環させる働きを司る「心臓」という器官や、呼吸を司る「肺」という器官が存在するのと同じように、心の働きを司る「脳」という器官が存在すると考えられているのである。そして、心筋梗塞が循環を司る心臓の障害であり、肺炎が呼吸を司る肺の障害であるのと同じように、精神疾患は心の働きを司る脳の障害だというわけである。演者は、心と脳に関する「空脳論」と名づけた演者独自の論考に基づき、この「脳は心の働きを司る器官である」という「脳神話」の中心テーゼを否定する。空脳論によればこのテーゼは、「環境からの刺激（入力）や行動（出力）とは区別された因果的媒介項としての『心の働き』なるものが存在する」という「心に関するテーゼ」と、「感覚器官や運動器官とは区別された因果的媒介項としての『脳』なる器官が存在する」という「脳に関するテーゼ」の二つから導き出されている。つまり、「心に関するテーゼ」と「脳に関するテーゼ」のそれぞれを否定することができれば、「脳は心の働きを司る器官である」というテーゼを否定することができると考えられる

本発表ではまず「脳に関するテーゼ」の方を否定する。すなわち、「器官」という語の使用法を再検討することによって、「脳」は独立した一つの器官ではなく、他の様々な器官の一部が集まって構成された解剖学的部位に過ぎない、と考えることができる。次いで、人間を人間たらしめる「心の働き」の典型である命題的態度に着目し、「心に関するテーゼ」を否定する。すなわち、「自分語り」という語り行動を中心とした身体活動と、それらの因果的背景となっている身体的準備状態とによって、信念や欲求などの命題的態度およびそれらに関連した意図的行動や行動変容などの「心の働き」は、私たちが日々行っている全身と環境との因果的相互作用の一つに過ぎない、と考えることができる。こうして、「脳神話」の中心テーゼである「脳は心の働きを司る器官である」というテーゼは否定され、このテーゼを前提としている「脳の障害としての精神疾患」という概念は空虚であることが示される。

空脳論によれば、「自分語り」を中心とした人間を人間たらしめる「心の働き」は、個体を社会文化的一員たらしめる「生態学的機能」と名づけた合目的機能をもっている。このように考えると、人間を人間たらしめる心の働きにおける障害である精神疾患は、「自分語り」を中心とした身体活動とそれらの因果的背景となっている身体的準備状態における何らかの障害により、それらが本来発揮すべき生態学的機能を発揮できなくなってしまった状態とみなすことができる。つまり、このような「自分語り」を中心とした全身と環境との因果的相互作用全体を「語り行動システム」と名づけるなら、精神疾患を「語り行動システムの障害によって社会文化的な適応不全をきたした状態」と定義することができる。

「語り行動システムの障害としての精神疾患」という、空脳論に基づいて新たに提唱された概念は、精神疾患の病態は様々な要素が複雑に絡み合っていて構成されており、その治療には精神療法をはじめとする心理社会的治療が不可欠であると考え、精神科医の間で広く共有されている直観とも合致している。